

最新の流行語にみる短期言語変遷モデル構築の可能性：「かわちい」に関する一考察*

吉田江依子

This paper aims to analyze “kawachi’i,” which was one of the Japanese buzzwords in 2023. Since buzzwords are used mainly by young people, they are considered deviant or disordered words. However, when looking at the long history of linguistic changes, the wrong way of saying something by one generation can trigger subsequent language changes. Buzzwords can be a turning point in language change. Thus, considering how buzzwords and short-term transitions are created and changed is as meaningful as studying long-term transitions in diachronic linguistic research. This paper concludes that “kawachi’i” is a highly novel linguistic phenomenon created through complex steps and proposes how it was formed. Furthermore, I discuss how the words may influence the derivation of languages in the future.

1. はじめに

毎年年末になると、その一年間に流行した言葉が「新語・流行語」として発表され、世間を賑わす。流行語とは、「ある時期、多くの人々の間で盛んに使われる語や言い回し」（大辞泉）、「ある期間、興味を持たれて多くの人に盛んに使用される語」（広辞苑）のことを指す。マスメディアなどが大きくとりあげるものとして、株式会社ユーキャンが主催している「ユーキャン新語・流行語大賞」があるが、それ以外にも三省堂や小学館などが独自の方法でその年の流行語を発表している。¹

流行語の多くはその年に流行った出来事や物や人の名前を表すものである。

2023 年の流行語を例にとると、「生成 A I」（物の名前）、「新しい学校のリーダーズ」（人の名前）、「地球沸騰化」（出来事）、「ペッパーミル・パフォーマンス」（行為）などがある。多くは流行したものの自体が廃れることによってその言葉自体の使用もなくなっていく。コロナ禍の流行語である「3密」（2020 年）や「黙食」（2021 年）などは 2024 年の現在ではそれほど耳にすることがなくなっていることを思い出してほしい。このような流行語は、いわば外的な要因によって流行が左右されており、ことばが流行したのではなくその名称に関する世相が流行したと言える。

一方、既存の言葉を曖昧にしたり、過度な省略で表した言葉が、言葉自身の新奇性から流行することがある。たとえば 2000 年代初めに流行った「ビミョー」は既存の言葉を曖昧にし、元来の意味から様々な意味へ解釈が拡大した。また「あざーす」は「ありがとうございます」を過度に省略した言葉である（桑本 (2010: 42)）。これらは外的な物や人や出来事に付随して流行した言葉ではない。世相に付随する流行語の発生の理由を外的な要因であるとする、このように形を変えた言葉そのものの新奇性から流行した語句の発生は内的な要因に関わるものであるといえよう。

内的な要因によって出現した新語・流行語は、若者を中心に使用され、「逸脱した」あるいは「乱れた」言葉として見られがちである。しかし長い言語変化の歴史を俯瞰した場合、ある世代が使用した間違っただけの言い方がその後の言語変化を引き起こすきっかけになることもある。千年前の言語を文献などで調査し、どういった形でこれまでに変化してきたのかなど長期的変遷を分析している研究は権威ある通時的言語研究として認識されるが、千年前に変化した時点では逸脱した乱れた言葉であっただろう。それらが長い年月をかけて新しい形や新しい意味で現代の言語に定着していることを考えれば、今まさに内的な要因によって生み出された新語は、新しい言語の誕生の瞬間であり歴史の瞬間を目の当たりにしているといっても大げさではないと考える。どのように生み出され変化していくのか、短期的な変遷について考察することも長期的変遷を研究することと同様、通時的言語研究として意義あるものと考えられる。

本論文では 2023 年の流行語・新語に認定された「かわちい」に焦点をあてて分析を行う。「かわちい」は SNS を中心に流行した。『ち』の発音を入れることで少し幼い感じや舌足らずな印象を与え、『かわいい』よりも、さらにかわ

いい感を出すために『かわちい』と表現する語である」(伊藤 2023) と解説されている。世相に付随した名称ではなく内的な要因に基づいて発生した流行語である。² 「ちい」を使った同様の形容詞の幼児語に「さみちい」「うれちい」などがあり、「かわちい」も一見したところ同様の音変化から自然発生的に生まれたものとして見過ごす人がいるかもしれない。しかしこの「かわちい」という語は他の幼児語のような自然発生的な語ではなく言語学的な観点からみると大変興味深いデータである。本論文ではこの流行語が複雑なステップを経てつくられた新奇性の高い言語現象であることを指摘し、どのように形成されたかについて分析をする。そして今後の言語の派生にどのような影響をあたえていくのかその可能性に言及したい。

本稿の構成は以下のとおりである。2 節では日本語の形容詞の種類について概観し、「ちい」に変化する形容詞の特徴について述べる。3 節では音の有標性と従来の幼児語の関連性について述べる。そして4 節では一般的な幼児語の特徴を紹介し、5 節で「かわちい」がどのように作られたのかについて考察をする。6 節では将来の展望と問題点について言及する。

2. 日本語形容詞の分類

日本語の形容詞は「語根+接尾辞」で形成されるが、接尾辞の(非過去形の)形の違いで「イ形容詞」と「ナ形容詞」の2種類に分類される。

- (1) a. イ形容詞：しろい、はやい、ながい、とおい、かなしい、
たのしい
- b. ナ形容詞：しずかな、おだやかな、じょうぶな、ゆかいな、
らかな
- (2) a. 日本で いちばん たかい 山は富士山だ。
- b. この 町には にぎやかな ところがすくない

(高橋 他 (2005: 137))

それぞれの形容詞は(3)に示したように活用される。

(3)

	イ形容詞	ナ形容詞
終止形	たか・い	しずか・な
連体形	たか・い	しずか・な
中止形	たか・く	しずか・に
条件形	たか・ければ	しずか・なら
譲歩形	たか・くても	しずか・でも

イ形容詞である「たかい」は語幹「たか」に活用された接尾辞「い・い・く・ければ・くても」がつく。ナ形容詞である「しずかな」は語幹「しずか」に活用された接尾辞「な・な・に・なら・でも」がつく。

イ形容詞は語幹の末尾の音によってさらに2種類に分類されることに着目したい。ひとつは、(4a)で示したように、「し」で終わる語、もう一つは、(4b)で示したように「し以外」で終わる語である。³

- (4) a. かなし・い (悲しい)、さみし・い (寂しい)、うれし・い (嬉しい)、
いそがし・い (忙しい)、はずかし・い (恥ずかしい)、
うらやまし・い (羨ましい)、ひとし・い (等しい)、くわし・い
(詳しい)、たのし・い (楽しい)
- b. かわい・い、はや・い、おそ・い、おおき・い、ちいさ・い、
なが・い、いた・い、かゆ・い、うるさい、くさい、あつい、
にく・い、あか・い、たか・い、かた・い、なが・い、あま・い、
つよ・い、ほそ・い、おも・い、まる・い、うま・い、さむ・い

これらの形容詞のうち、幼児語として「ちい」と語形変化するのは(4a)で示した語幹が「し」で終わるイ形容詞である。

- (5) かなち・い、さみち・い、うれち・い、たのち・い、はずかち・い、
うらやまち・い、

(5)のような変化はなぜ起こるのだろうか。まずはその理由について音の有標性が関与していることを説明する。

3. 音の有標性について

3.1 音声産出の仕組み

世界には様々な言語があり、言語によって存在する言語音と存在しない言語音がある。たとえば日本語の母音は「あ、い、う、え、お」の5つしかないが、英語は20を超える数の母音があるといわれている（窪園(1998:18)）。さらに世界に目を向けると3つの母音しか持たない言語もある。(6)は短母音の数による言語の数をまとめた表である。

(6)

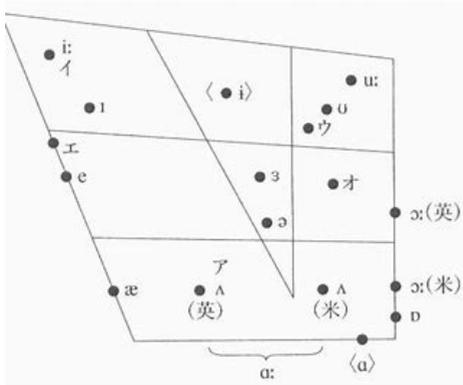
母音 の数	2	3	4	5	6	7	8	9	10
言語 数	2	25	30	109	54	44	23	20	10
百分 率(%)	0.6	7.9	9.5	34.4	17.0	13.9	7.3	6.3	3.1

(窪園(1999:24) / UPSID データベースより)

これはある言語には存在する母音が別の言語には存在しないということを示す。同様の違いは子音にもみられ、ある言語には存在する子音が別の言語には存在しないことがある。身近な例で言えば、英語の[r]や[l]である。この2つの音は日本語には存在しない。日本人が第二言語として英語を学習する場合、[l]と[r]の区別が難しいと言われているが、これは日本語の子音体系にはこの2つの音が存在しないことが要因の1つとなっている。

このように個別言語の音には様々な違いがあるように思われるが、人間が母音や子音などの音を産出する仕組みは全く同じである。音声産出の仕組みは以下のとおりである。ヒトの言語は肺から出された空気が気管をとおり、口腔や鼻腔へとすすむ。気管を通る際に声帯の振動の有無によって有声音と無声音に分けられる。さらに口腔や鼻腔などの働きによって母音や子音が産出される。その際母音は「舌の高さ」「舌の前後位置」「唇の形状」の3点によって決定される。個別言語の母音の違いは、これら発声器官における形状の微妙な違いによって生み出されるものである。(7)は日本語と英語の母音の違いをまとめた母音四角形である(今井2007)。

(7)



日本語の「イ」と英語の短母音 [ɪ] を比べてみよう。前者のほうが後者よりも舌の位置が高く、前に置かれている。この微妙な違いが両者の音の違いを産み出している。

一方、子音は口腔や鼻腔において空気の流れを阻害することによって産出され、「調音点」「調音法」「声帯の振動の有無」の3点によって決定される。

調音点とは「声道のどの部分で空気の流れが阻害されるか」を示すものである。例えば「両唇音」は両唇を使って空気の流れを阻害する音であり、また「唇歯音」は唇と歯を使って空気を阻害する音である。調音法とは「声道を通る空気の流れがどの程度阻害されるか」を示すものである。例えば「閉鎖音」はいったん完全に空気の流れを止め、それを開放することによって出す音であり、「摩擦音」は声道を狭めてそこから空気を通すことによって摩擦させて出す音である。声帯の振動の有無では、上述したように声帯を振動させることによって有声音を、振動させないことで無声音を産出する（窪園 (1998: 21)。(8)(9)は英語および日本語の子音についてまとめた表である。

(8) 現代英語の子音の分類表

調音法	調音点						
	両唇	唇歯	歯間	歯茎	硬口蓋 歯茎	軟口蓋 蓋	声門
閉鎖音 無声	p			t		k	
有声	b			d		g	
破擦音 無声					tʃ		
有声					dʒ		
摩擦音 無声		f	θ	s			h
有声		v	ð	z			
鼻音	m			n		ŋ	
側音				l			
半母音	w			r	j		

(9) 現代日本語の子音の分類表

調音法	調音点						
	両唇	歯茎	硬口蓋歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門	
閉鎖音 無声	p [パ行]	t [タテト]			k [カ行]		
有声	b [バ行]	d [ダデト]			g [ガ行]		
破擦音 無声		ts [ツ]	tʃ [チ]				
有声		dz [ズゼゾ]	dʒ [ジ]				
摩擦音 無声		s [サスセン]	ɕ [シ]				
有声	ɸ [フ]	z [ザズゼゾ]	ʑ [ジ]	ç [ヒ]		h [ハヘホ]	
鼻音	m [マ行]	n [ナヌネノ]					
弾き音		r [ラ行]					
半母音			J [ヤ行]		w [ワ]		

表を比べてみると、調音法については英語には側音があるが日本語にはなく、反対に日本語には弾き音があるが英語にはない。調音点については英語には唇歯音と歯間音はあるが日本語にはなく、反対に日本語には硬口蓋音があるが英語にはない。このように両方で存在する音と存在しない音はあるが、いずれも子音を形成する3つの観点に基づき子音が生成されている。

3.2 有標な音と無標な音

本節では有標性という考え方について説明をする。荒木・安井(1992: 839)では次のように述べている。

(10) 有標：例外的なものや複雑で一般的でないもの、不規則で予測がつかないか、つきにくいもの

無標：一般的で簡単なもの、規則的で予測のつくもの

例えば、英語の単数形と複数形では単数形が無標であり複数形が有標である。現在形と過去形では現在形が無標であり複数形が有標となる。どちらも後者は前者に接辞を付加することによって形成されるので前者に比べて複雑な形式であり、また不規則変化形などがあり不規則で予測のつきにくいものとなっている。

この有標と無標という用語はもともとプラーク学派のヤコブソンらが音について論じる際に取り入れた用語である。Jacobson (1968)は、母音や子音に有標性の違いがあると提案した。どの音が有標でどの音が無標であるのか、判断基準となる尺度として(11a-c)の3つをあげている。

(11)

尺度	無標	有標
a. 自然言語に出現する頻度	多い	少ない
b. 子供の言語習得における獲得の順序	早い	遅い
c. 失語症患者の音の喪失の順序	遅い	早い

つまり、より一般的で簡単な音であればあるほど、自然言語に出現する頻度も多く、簡単であるがゆえに子供は発声器官が未熟なうちからでも早くから獲得ができ、失語症患者は最後まで発音できると考えられる。

具体的にみてみよう。例えば母音は [a] がもっとも無標な音であると考えられている。⁴ (11)の尺度からこの主張は支持されている。世界の言語を観察したとき、それぞれの言語がもつ母音数に違いがあることを(6)で示したが、興味深いことにいずれの母音体系においても [a] を持たない言語はほとんどないと言われている。例外として3母音体系の言語 25のうち、[a] (もしくは[æ]) を含まない言語は 2 例、4 母音体系の言語 30 のうち1例あるが、5 母音体系以上では[a] を含まない言語は存在しないことが SPIUD で観察されている (窪園 (1999:24))。⁵ また、子供は生後 6 週間頃目のクーイング(cooing)の段階から 4 か月頃の喃語(babbling)の段階を経て 1 語発話段階へと進んでいくが、獲得する言語に関係なく [a] という母音を含んでいる。

- (12) a. クーイング (6 週目—4 か月) [aaaaahhhhh]
 b. 喃語 (4—12 か月) [ba] [ma] [baaaaa] [maaaa] [bababa]
 [mamama][gagaga] [bama]

さらに子供にとって身近で早い段階に獲得するといわれている「お父さん」「お母さん」を示す単語をみると、多くの言語で[papa] [mama]などと[a]を含んでいることが分かる。

(13)

	お母さん	お父さん
中国語	[mama]	[papa]
ラテン語	[mater]	[pater]
イタリア語	[mamma]	[papa]
タイ語	[mɛ]	[pʰɔ]
インドネシア語	[bu]	[pak]
日本の公家言葉 (江戸時代)	[ota:san]	[omo:san]
古代日本語	[papa]	[titi]

(窪園 (1999:51))

(13)で示したように、例えば中国語は[mama][baba]、イタリア語は[mamma][papa]、インドネシア語はお父さんを表す語は[pak]であり、いずれも[a]を含んでいる。古代日本語でも母を[papa]と発音していた。このことか

ら[a]が子供にとって発音しやすい簡単な、すなわち「無標な」音であることを示している。

子音は、調音点と調音法においてそれぞれ有標な音と無標な音がある。個別言語に関係なくすべてのヒト言語において、調音点は唇や歯茎など口の出口付近でつくられる音のほうが軟口蓋のような口の奥でつくられる音よりも簡単であり、無標の音であるといわれている。(8)(9)の子音分類表でみると、表の左側にいく調音点ほど無標となる。もっとも無標である[p][b][m]が世界の言語で[papa][mama]などに使われていることは、もっとも無標な母音[a]と組み合わせられているところからも証明されるであろう。また、失語の観点からも有標性が観察される。失語症患者は「蛍光灯」[keikoutou]について述べる際、[k]が[p]となって[peikoutou]と発語する。これは軟口蓋音[k]よりも両唇音[p]のほうが簡単で最後まで残る無標の音であることを示すものである。⁶

次に調音法についてみてみよう。調音法は空気を阻害する音が無標な音であるといわれている（このような音を子音性が高いという）。具体的には、空気を完全に阻害する閉鎖音が最も無標な音であり、摩擦音や破擦音のように空気の流れの阻害が弱まる子音性の低い音が有標な音となる。こちらも個別言語に関係なくヒトの言語に共通していて、閉鎖音が無標の音であり、破擦音、摩擦音の順に有標性が高くなる。鼻音は口腔内の空気の流れを完全に遮断し、その結果鼻から空気が抜けていく音である。鼻腔閉鎖音と呼ばれているように、口腔内で遮断されるという点で子音性の高い音となり、無標の音であるといわれている。「お父さん」「お母さん」を表す言語において、子音部分で閉鎖音 [p][m]が使われていることからそれが示される。また音の喪失という観点からも調音法における有標性の段階が示される。音の喪失は調音点では有標な軟口蓋音から始まり、無標な両唇音は最後まで残る傾向にあるという。さらに失語において「さかな (sakana)」のかわりに「ツェカナ (tsakana)」が用いられることがあり、これは摩擦音が先に喪失され破擦音が残ることを示し、前者が後者よりも有標性が高いことを示している。

本節では人間言語の音声産出の仕組みとその仕組みに基づき、音には有標性があるということを概観した。

4. 有標性理論から見る幼児語の特徴

4.1 幼児語における音変化

子供の言語獲得について着目したとき無標な音から有標な音へと段階を追って獲得することを先に触れた。それがいわゆる「幼児語」と呼ばれる幼児期特有の語彙の一部を生み出している。この点について本節で詳しく述べる。

人間はあらゆる場面において基本的なものをまず習得してから、段階を追って複雑でより難しいものを習得する。たとえば、「鉄棒で大車輪はできるが逆上がりはできないという状態」や「微分・積分はできるが足し算や掛け算はできないという状態」はありえない（窪園 (1999: 21)）。人はまずより簡単な逆上がりや足し算・掛け算を習得して、より難しい大車輪や微分・積分を習得していく。このような事象について有標性理論として(14)のように一般化されている。

(14) 有標性理論

物事に基本的なものや応用的なもの、単純なものや複雑なものという序列が存在する。応用的なものや複雑なものは基本的なものや単純なものを前提として存在する。（窪園 (1999: 1)）

音の習得に関しても同様のことがいえる。人間はより簡単な基本的な音を習得してから複雑でより難しい音を習得するという段階を踏む。つまり、無標の音を獲得したあとに有標の音を獲得するというものだ。子供が言語の習得を始める際には、いきなりすべての音を獲得しているわけではなく無標の音から有標の音へと順序だてて獲得していくことになる。これがいわゆる「幼児語」と呼ばれる幼児期特有の語彙を生み出している理由の1つである。(15)をみてみよう。大人はしばしばこれらの幼児語を未熟な言い間違いととらえることがあるが、そうではなく、無標から有標へという有標性理論に基づいた発話なのである。⁷

(15)

	大人	幼児語
調音点	a. ケーキ [ke:ki]	ちえーち [ʧe: ʧi]
	b. ゲゲゲのきたろう	じえじえじえのちたろう
調音法	c. ぞうさん	どうたん
	d. れいぞうこ	れいどうこ
	e 父さん	とうたん
	f. バス	ばちゅ
	g. 何ですか	なんでちゅか
	h. 来なさい	きなちゃい

例えば幼い子供は「ケーキ」のことを「チェーチ」、「ゲゲゲのきたろう」のことを「じえじえじえのちたろう」と言うことがある。これは調音点に関する有標性の問題である。上述したように、調音点は口の奥で作り出される音よりも口の出口付近音のほうが発音が容易であり無標である。この場合、「け」「き」「ゲ」([k][g])は軟口蓋音で最も奥でつくられる音であり有標性が高い音であると考えられる。この段階の子供はまだそこまでの音を獲得できず、それよりも無標な（出口付近に近い）硬口蓋歯茎音「ち」「じ」([ʧ][ʧj])で代用している。また (15c-e)で示したように「ぞうさん」「れいぞうこ」「とうさん」をそれぞれ「どうたん」「れいどうこ」「どうたん」と言う。これらも未熟な言い間違いではなく、調音法に関する有標性の理論に則った発話となっている。上述したように、調音法では子音性の高い音が無標であり、無標の音から獲得するという観点から、子供の獲得の順としては、閉鎖音>破擦音>摩擦音となる。摩擦音や破擦音である「ぞ」「き」は閉鎖音（「ど」「た」）よりも有標性が高く、(15c-e)では、子供はより無標な閉鎖音である「ど」「た」を使っていることが分かる。また(15f-h)の「バス」「何ですか」「きなさい」が「ばちゅ」「なんでちゅか」「きなちゃい」になるのは、破擦音のほうが摩擦音よりも子音性が高く無標であるため、有標の摩擦音の代わりに使われているからである。

4.2 形容詞における幼児語と有標性

形容詞において観察される幼児語として、(16)のような語句がある（窪園

1999)。

(16)

大人	幼児語
a. うれしい [u-r-e-ʃ-i-i]	うれちい [u-r-e-ʃ-i-i]
b. さみしい [s-a-m-i-ʃ-i-i]	さみちい [s-a-m-i-ʃ-i-i]
c. はずかしい [h-a-z-u-k-a-ʃ-i-i]	はずかちい [h-a-z-u-k-a-ʃ-i-i]
d. たのしい [t-a-n-o-ʃ-i-i]	たのちい [t-a-n-o-ʃ-i-i]
e. ちいさい [ʃ-i-i-s-a-i]	ちいちゃい [ʃ-i-i-ʃ-a-i]
f. 小さい [k-u-s-a-i]	くちゃい [k-u-ʃ-a-i]
g. うるさい [u-r-u-s-a-i]	うるちゃい [u-r-u-ʃ-a-i]
h. おそい [o-s-o-i]	おちよい [o-ʃ-o-i]

(16a-d)では、イ形容詞の語幹「し」が幼児語において「ち」に置き換わり、(16e-g)では「さ」で終わる部分が「ちゃ」に、そして(16h)では「そ」が「ちよ」に置き換わって発話されている。この変化は無原則なものではない。より厳密に観察すると、「し」「さ」「そ」の中でも母音については変化はなく、子音部分の[ʃ]あるいは[s]の部分が[ʃ]に変化している。この変化は有標性の原則に従ったものである。上述したように調音法において破擦音は摩擦音よりも無標な音である。形容詞における幼児語もより簡単な音つまり無標な音で代用しているということが言える。つまり、形容詞における幼児語は自然な生理的現象である有標性理論に基づくものであるといえよう。

しかし、「かわちい」は有標性理論に基づく音変化ではない。「かわちい」([k-a-w-a-ʃ-i-i])は「かわいい」([k-a-w-a-i-i])の語幹の最後の母音[i]に[ʃ]があらたに添加されたものである。(16)で示した形容詞の幼児語のように有標な音が無標な音に置き換えることによって産出された語ではない。ではこの語はどのような変化を経て形成されたのであろうか。次節で論じる。

5. 提案

5.1 様々な新語形成の要因

窪園 (2002)によれば、新語が作り出される典型的なパターンには、既存の語をつなぎ合わせる方法 (合成) と既存の語を短くする方法 (省略) の2つ

のパターンがある。前者によって作られた語は合成語とよばれ、さらに複合語と派生語の2種類に下位分類される。

(17) a. 結婚・難民、帰宅・難民

b. ゆとり・世代、Z・世代

(18) きよど・る、ググ・る

たとえば(17a)で示したように、既存の「難民」という語に既存の「結婚」「帰宅」という語をつなぎ合わせることで結婚難民(1991年)、帰宅難民(1995年)など拡大した意味をもつ新しい複合語が形成される。また(17b)で示したように「世代」も「ゆとり世代」「Z世代」など様々な語句と合成されることで新しい流行語を生み出した。また派生語には、(18)のように様々な名詞やその省略形に動詞を作る接辞「る」を組み合わせて形成した「きよどる」(きよど(う不審)+る)、「ググる」(グーグル+る)などがある。

省略によって作られる短縮語は新語の中でもっとも多いと言われている。これはさらに、語頭を残し下の部分を省略する下略(エクステンション→エクステ、りょうかい→りょ、いみふめい→いみふ)、語句の真ん中を省略する中略(きしよくわるい→きしよい、はずかしい→はずい)、語句の上の部分を省略する上略(サラリーマン→リーマン、ディズニーシー→シー)に下位分類される(米川(2019: 639))。短縮語の中では下略が最も多いと言われている。また短縮語と短縮語を組み合わせて複合語が形成される場合も多い。その場合、下略+下略の構造がよく見られる(例:ロスト+ジェネレーション→ロスジェネ、情報+弱者→情弱、コミュニケーション+障害→コミュ障、アクリル+スタンド→アクスタ)。時には句や文を省略する場合もある。(あけましておめでとう→あけおめ、コピーアンドペイスト→コピペ)などである。

さらに、一般的な言語変化の要因として異分析や逆形成などがあげられる。異分析とは、本来の語形成とは異なる解釈を行うことである。よく知られている例にhamburgerがある。これは元々地名のHamburgにerがついたもの(Hamburg-er)であったのだが、ham-burgerと異分析され、burgerが独立した語として認識されるようになりbeef-burger、cheeze-burgerなど一連の語が生成された。日本語では軽い空気の入った球を意味する「軽気・球」が「軽・気球」と異分析され、現在は「気球」が単独で使われている例が有名である。

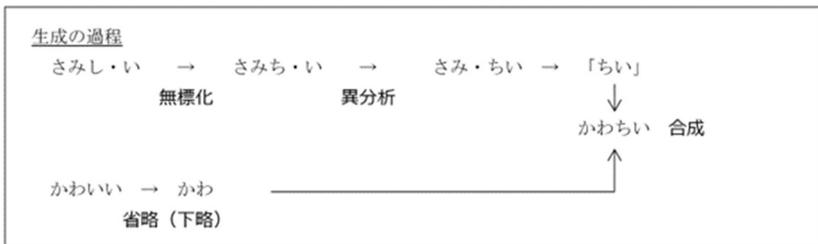
逆形成とは、派生語ではない語を派生語と勘違いし元の語を誤って作り出

す生成法である。たとえば、英語の *beggar* や *baby-sitter* はもともと *beg・ar* や *baby-sit・er* などのように分けることはできなかった。しかし、*liar* や *singer* のように、接辞 *-ar* や *-er* が人を表す接尾辞として使われていることから、*beggar* の *ar* や *baby-sitter* の *er* も人を表す接辞と誤って解釈され、本来なかった *beg* や *baby-sit* という動詞が形成された。日本語では「つまらない」という語のうちの「ない」を接尾辞として解釈し、そこから「(その話は)つまらなくない、つまるよ」というような表現ができた。

5.2 分析

本稿では「かわちい」は音の有標性などから自然に形成された語ではなく、前述した複数の要因が関わることによって作られた新語であると考え、その過程を(19)として提案する。

(19)



まず、「し」で終わる「イ形容詞」において、音の有標性に基づき自然発生的に幼児語の「さみちい」が形成される。この時点では、あくまでも「ち」は「し」よりも簡単な、無標な音としての変化であり、「ち」は語幹の末尾に付随するものである。しかし、このような自然発生的な語が幼児語として多く存在することで、異分析によって「ちい」が独立した接尾辞として「幼児語の形容詞の語尾につく接辞」というように誤って解釈をされるようになった。

一方、「かわい」の語幹部分から「かわ」が利用される。これは一般的な下略法に従うものである。短縮される語になる条件として窪園(2002:89)は①よく使われる語であること、②復元がしやすいことを挙げている。「かわい」の「かわ」は省略語として(20)のように様々な複合語を形成していることから、①と②の条件を満たしているといえよう。

- (20) おさかわ (幼くてかわいい)、ぐうかわ (ぐうの音もでないほどかわいい)、おばかわ (おばさんぽくかわいい)、ダサかわ (ださくてかわいい)、ナチュかわ (ナチュラルでかわいい)、おしゃかわ (おしゃれでかわいい) (『現代用語の基礎知識 2024』より引用)

この省略語の「かわ」が、異分析された「ちい」と合成されることによって「かわちい」が形成されたと考える。以上のように、「かわちい」は「さみちい」や「うれちい」が無標化というひとつのステップで形成されるのとは大きく異なり、言語変化における複数の要因が関わることによって形成された語であるといえる。

さて、「ちい」が異分析された接辞として用いられている例は、「かわちい」が 2023 年に流行語となった以前に、すでにみられる。⁸

- (21) つらちい (2018 年)、うまちい (2021 年)、おおちい (2022 年)、
いかちい (2023 年)、きれちい (2023 年)

従来の「しで終わるイ形容詞」から拡張し、「し以外で終わるイ形容詞」(つらい、うまい、おおきい、いかつい) や、さらには「きれちい」(←きれいな) の例が示すようにナ形容詞にまで用いられており、「ちい」がすでに独立した、自然の音変化を無視した強力な派生接辞として認知されていることが分かる。「かわちい」はその流れの中で生じたものであるといえよう。⁹

では、すでに使われていた「ちい」にもかかわらず、「かわちい」のみが流行語となり広く受け入れられるようになった要因は何であろうか。本稿では 2 つの理由があると考ええる。第一に「かわいい」という語が持つ意味が「ちい」という接辞のイメージと一致したことであろう。1 節でも述べたように「かわちい」を使う理由として、「かわいいという感じをさらに出すために」とある。両者のイメージの一致によって語の意味を増幅できるという副次的な効果が若者に受け入れられたのだろう。第二の理由として、そしてこれが大きな要因となっていると考えるが、「ちいかわ」と呼ばれるキャラクターがメディア等で取り上げられるようになったことも、「かわちい」を受け入れる素地になったのではないかと考える。ちいかわは 2020 年から Twitter 上で漫画掲載をされ 2021 年に単行本として発行、2022 年よりテレビアニメとして放映された。¹⁰ ただし、これは「ちいさくてかわいい」を省略したものであり、「かわいい」から派生したものではないということが重要である。しかし、「ちい」と「かわ」というそれぞれの形態の単位が明確になり、両者を結び

付けることに抵抗がなくなったのであろう。

このように、「かわちい」の語句自身は内的な要因によって形成されたものであるが、それが外的な要因に後押しされるような形で流行語として爆発的に使用され広く認知されるようになったと考える。

6. 将来の展望と残された問題

新語・流行語はその時代に流行した語として注目されるが、その後、その言葉の在り方は3つのパターンが考えられる（吉田 2020）。

- (22) a. そのまま使われなくなる
- b. 定着をする
- c. 語の一部のみが定着して該当語以外にも使われる

すでに若者を中心に用いられていた「ちい」は「かわちい」によってより広い層に認知をされ、その地位を確立するところまでになった。本稿では、「かわちい」が語として定着する (cf. (22b)) だけでなく、「〇〇ちい」が幼い感じを表す言い方としてさらに広く認知され、独立した「ちい」が接尾辞として定着して様々な形容詞の下略された語幹と結びついて使われる (cf. (22c)) のではないかと予測する。¹¹

ただし、新語が定着するか否かについての是非を確認するには長い年月がかかるため、現時点でここでの主張を客観的に証明することは難しく、本研究の問題点として残される。たとえば、しばしば「乱れた」「誤った」日本語として言及されてきた「ら抜きことば」は、否定的な意見はまだ残されながらも近年ようやく文化庁などがその使用についての認識を変えており、用法として認められるようになってきた。¹² これが使われ始めたのは大正の末から昭和の初めにかけてと言われており、少なくとも100年かかっている。¹³ あるいは、広辞苑等の辞書に掲載されるか否かというのもその語が定着したひとつの証明となるかもしれない。広辞苑編集部 (p.c.) では「およそこれまで10年は使われ続けていて今後10年くらいは使われ続けられるであろう言葉」を基準に定着した語として掲載すると述べている。この場合は10年の期間を要し、2033年に「かわちい」あるいは「ちい」が広辞苑などに掲載された場合、ここでの予測が正しいということになる。もっとも短期間で客観的な証拠を出すには、西尾 他 (2023) が有効ではないかと考える。彼らは情報工学的

観点からこれまでの流行語のデータを2年間分収集し、数量的に分析することによって長期流行型と短期流行型の分類を行った。この手法に基づき、「かわちい」および「〇〇ちい」のこれまでのデータを収集し予測することによって、客観的な予測が可能になると考える。この分析は2年程度の観察を基盤にしているので、より短い期間での判断が可能になる。この手法に基づいた分析は今後の研究課題の一つとなるであろう。

以上本稿では短期言語変遷のモデル構築に向けて、2023年の流行語である「かわちい」の語形成の仕組みについて分析し、通常の幼児語とは異なる複数の造語法に基づいて形成された語であることを指摘した。また新語としての将来性について言及し、語としてのみならずその一部である接辞「ちい」は今回の流行語「かわちい」を契機としてより生産性の高いものになるのではないかと予測した。ただし、この予測に対する客観的な証明は今後の研究に委ねたい。

注

*本研究は JSPS 科研費 JP22K0528 の助成を受けたものです。

(1) 2023年に選ばれた新語・流行語を以下に記す(伊藤 2023)。

(i) 大辞泉が選ぶ新語大賞 2023

生成AI (大賞)

闇バイト、蛙化現象 (次点)

(ii) 2023 ユーキャン新語・流行語大賞

アレ (大賞)

新しい学校のリーダーズ、OSO18/アーバンベア、ペッパーミル・パフォーマンス、観る将、4年ぶり/声出し応援、生成AI、地球沸騰化、闇バイト、蛙化現象 (以上、トップテン)

(iii) 三省堂・今年の新語 2023

地球沸騰化、ハルシネーション、かわちい、性加害・性被害、〇〇ウォッシュ、アクスタ、トーンポリシング、リポスト、人道回廊、闇バイト

(2) 2023年の流行語のうち内的な要因に基づく語は「かわちい」の1つである。

- (3) 形容詞は意味的にはそれが修飾する名詞の状態や属性を表すが、「し」で語幹が終わる形容詞は状態を表すものがほとんどである。「し」以外の形容詞は状態を表すものや属性を表すものの両方が含まれる(影山 2009)。
- (4) 厳密に言えば、個別の音を指しているのではなく、開口度をもっとも大きい音が無標性が高いとされており、人間の母音システムの中で、[a]がもっとも開口度が大きい。
- (5) 3母音体系の言語で、[e]や[o]を持たない言語は 20 言語 / 25 言語 (80%)、4母音体系の言語では 22 言語 / 30 言語 (73%)であり、[a]が[e]や[o]と比べて無標であることが分かる。
- (6) 「鍋」[nabel]を[mabel]と言うことが観察されている。これは軟口蓋音[k]や歯茎音[n]よりも両唇音[p]のほうが無標であることを示している。
- (7) ヨシダ (2021)は、有標性に関する興味深い事例として中日新聞の「おたまじゃくし」に投稿された実際の祖父母と孫の会話について述べている。
- (8) データは筆者が X (旧 Twitter)より収集したものである。
- (9) 最近の X (旧 Twitter)上での用法について調査をしてみたところ、(i)で示したように「ちい」がさらに変化している様子も伺える。

(i) かわ・ちー かわ・ちい、かわ・ち、かわ・ちな

なかでも興味深いのは、「かわちな」という用法である。これはナ形容詞の「きれいな」との関連性を思わせるものであり、「ちい」の柔軟な使われ方となっている。

- (10) ナガノ『ちいさくてかわいいもの』講談社
- (11) もちろん「幼児語」や「かわいいイメージを作り出す」など特別な使われ方となるだろう。
- (12) 文化庁は以下のような見解を述べている

いわゆる「ら抜き言葉」とは可能の意味の「見られる」「来られる」等を「見れる」「来れる」のように言う言い方のことで、話し言葉の世界では昭和初期から現れ、戦後更に増加したものである。「ら抜き言葉」(例:「見れる」)を専ら可能の意味に用い、受身・自発・尊敬(「見られる」)と区別することは合理的であり、五段活用の動詞(例:「読む」)における可能動詞(「読める」)と同様に可能動詞形と認めようとする考え方や、「ら抜き言葉」の増加は可能表現の体系的な変化であり、話し言葉では認めてもよいのではないかという考え方もある。書き言葉においても分野によってはその使用例が報告されている。(文化庁ホームページ 国語施策・日本語教育 より)

ただし、否定的な意見があることも示し、今後の動向を見守るの必要性があると付け加えている。

- (13) 「ら抜き言葉」も元々は昭和初期の旧制高等学校の学生たちが使うことで流行したと言われている若者ことばであった(姫野他(2005))。

参考文献

- 荒木一雄・安井稔(編)(1992)『現代英文法辞典』三省堂:東京.
- 姫野昌子・上野田鶴子・井上史雄(2005)『言語文化研究 III 現代日本語の様相』放送大学教育振興会.
- 今井邦彦(2007)『ファンダメンタル音声学』くろしお出版:東京.
- 伊藤剛寛(2023) 2023年12月21日 読売新聞 朝刊 10面 解説
- Jacobson, Roman Osipovich (1968) *Child Language, Aphasia and Phonological Universals*. Mouton: The Hague.
- 影山太郎(編)(2009)『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店:東京.
- 窪園晴夫(1998)『音声学・音韻論』くろしお出版:東京.
- 窪園晴夫(1999)『日本語の音声』岩波書店:東京.
- 窪園晴夫(2002)『新語はこうして作られる』岩波書店:東京.
- 桑本裕二(2010)『若者ことば 不思議の秘密』秋田魁新報社:秋田.
- 西尾俊斗, 武藤敦子, 島孔介, 森山甲一, 松井藤五郎, 横越梓, 吉田江依子, 犬塚信博(2023) 「Twitter における語の使用回数推移を用いた機械学習による流行語定着予測」第37回人工知能学会全国大会.
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈(2005)『日本語の文法』ひつじ書房:東京.
- 米川明彦(2019)『平成の新語・流行語辞典』東京堂出版:東京.
- 吉田江依子(2020)「流行語・新語の変遷における原因とその問題点:反証可能な流行語研究に向けて」*New Directions* 38, 39-58.
- ヨシダエイコ(2021)「じいじは呼び捨てではない、最大級のがんばり」2021年8月7日(2024年2月29日取得, <https://tenro-in.com/mediagp/192584>)